沖縄ルポ　II
92歳のハルさんのお話

別府大学文学部人間関係学科
教授　冨吉　素子

1 はじめに

2006年６月７日、東京地方裁判所は1950年代後半にドミニカに移住した人々の損害賠償請求の訴えを棄却する判決を言い渡した。当時の「外相や担当職員が、農業に適した土地かどうかを調査する義務や移住希望者に情報を提供する義務に違反した」（朝日新聞、2006年）ものの、入植から20年以上が過ぎ、賠償請求権が消滅しているというのが判決理だった。国ならびに移住者双方はこれを不服として控訴した。その一方で、当時の対応は違法だった、と判決のなかで指摘されたことを重く受け止め、政府は率直なお詫びと支給金の確保などを検討した。

このように昭和の初期や戦後には外国への移住が奨励され、また異国での豊かな生活を夢見て移民・移住するものが多かった。上記のドミニカ移住のように移住先の状況は厳しいことも多く、移住者が現地に根づくまでには労苦と忍耐が必要であった。

わけても沖縄からの移民・移住者はもっとも多く、ハワイ、ペルー、ブラジル、チリ、アルゼンチンのほか、アジアでは、フィリピン、ポナペなどの南洋諸国におよんだ。

ここでは、このような海外移住政策の中、政府の奨励策に則ったものではなかったが、1950年代に沖縄より海外に移住した一人の女性について述べてみたい。女性は永住を決意して移住したが、時代の波に翻弄されて、当地に骨を埋めることなく帰国した。帰国後は年金等、国の保障もなく、自身の人生に悲哀を味わい、しかし、周りの暖かい応援を受けて老いの日々を賢く生きている。女性の名は東吉本ハルさんという。

2 浜比嘉島の移民小史

ハルさんは、前号（「地域社会研究」第12号）に記した浜比嘉島の二つの集落のうち「比嘉」の出身である。この比嘉からは多くのシマ人が移住した。話はやや遡るが、日本国が開国し、日本人の海外渡航を許可したのは1866年であった。２年後には海外移民の斡旋を業とするものが現れ、1868年にハワイ向け350名、グァム向け42名が募集された。その後、移民先は北米、中南米、大洋州、ロシアなど徐々に広がり、移民する人々も1868年から1941年までに77万６千人余となった。そのような中でハワイへの移民について比嘉に関する興味深い一文がある。

「字比嘉は勝連村の縮図と見られる部落で、海外渡航者の歩合は村一位である。ハワイ渡航全盛時代の明治38、39年頃は勝連間切役場は渡航手続きのために殺到する比嘉の青年たちによって占領されてしまうことがよくあるといわれるほどであった。現在比嘉出身だけのハワイ在住者が140余人…」（「勝連村誌」、1966年）とあり、比嘉が早くから、多くの移民を出していた事がわかる。

ハワイ、ペルー、ブラジルは契約移民制度であったため、労働が過酷であったが、アルゼンチンは契約移民制度がなかったため、遠国であったにもかかわらず進出が早かったと考えられている。かれらの仕事は日雇い労働、工場労働、上流家庭の料理人、ボーイなどであったがその歩の悪さから次第に独立して事業を営むようになった。

3 ハルさんとの再会

2005年の９月に久しぶりにハルさんを訪ねた。ハルさんは現在、東吉本ハルといい、旧姓は我謝ハルといった。ハルさんは現在92歳で一人暮らし

である。生活は年金がなく菓子飲料と雑貨を「細々と」売って生活している。お客さんは日に数人のこともある。それでも毎日を楽しく過ごしているといい、とても前向きなオバアである。かの宮本亜門さんがときどき来て休んでいくという「大物」でもある。おもてなしに茶菓を出してくれたときにハルさんはこう言って勧めてくれた。「ショコラーテはいかが？」。勿論チョコレートのことである。話しているとときどきアルゼンチンのことばが混ざり美しく響く。甥がアルゼンチンにいていろいろな贈物を送ってくれるという。

ところで、現代の日本における老後の生活は年金なくしては考えられない。ハルさんは何故年金を受給できないのだろうか。結論からいえば、受給の資格がないからであり、当初は年金を受給できるようにかなり役場に出向き交渉をした。しかし、支払い期間の大事な時期にハルさんは日本にいなかったため支払い月数が足りず却下されたのである。それではハルさんはどこにいてどのような人生を送ってきたのだろうか。ハルさんはこころよく自分の人生を語ってくれた。

夫文作の仏壇の前でピースするハルさん

4 家から「逃げる」

ハルは戦前の尋常小学校を卒業後、家が貧乏できょうだいが多かったため、進学せず家の手伝いをしていた。弟妹の子守に明け暮れ、手伝いに追われていた。貧乏の程度は、学校で習字の時間に使う習字紙が４枚を１銭で買えたが、それが買えなかったことでわかる。まだ小学校に通っていたときでさえ、雨が降ると翌日は両親が芋蔓を植えるため忙しく、自分が幼い弟妹の面倒をみなければならなかった。そうすると学校に行くどころではなく、雨がうらめしかった。それでも２歳年上の兄は学校に行っていたから、「弟妹さえいなければ」とたびたび思った。「１人は足が生えて歩けるようになったから、子守がいった」。「足が生える」というのは、生まれて１年ほど赤ちゃんは寝ているが、１歳の誕生日頃より歩き始めることをいうらしい。

「ハル、学校にいこう」と言われるのが恥ずかしく、逃げていた。昭和２（1927）年14歳のとき家の手伝いばかりしているのがいやになり、友人と一緒にほんとうに「逃げた」。この場合の「逃げる」というのは文字通りの意味で、親に黙って「家出」することである。

目的は紡績会社の女工になることで、友人数人と那覇の仲介人のところへ行くことにした。島から出るには、今は橋もかかり、交通も便利であるが、当時は橋もなく、島から本島の港（屋慶名港）にまず船で渡り、それからバスで長い時間をかけて那覇に向かった。しかもそのとき村人に見つからないように、隣部落の港からそっと島を出た。しかし、那覇の仲介人のところに着いてみると、本人がまだ14歳であることがバレてしまい、しかも家を出て紡績工場に入るには親の承認（印鑑）と戸籍謄本が必要であることがわかり、やむなく家に戻った。家に戻っても決心は変わらず、親を説得し続け許された。やっとの思いで友人数人と川崎の富士紡績に入社した。

当時川崎工場には3000人の女工がおり、勤務は２交代制であった。日勤は午前６時から午後６時までであり、夜勤は午後６時から翌朝６時までの12時間勤務であった。勤務時間が長時間であったため、健康を害し、肺結核などで亡くなる人もいた。

最初は賃金が１日40銭で、月給にすると12円となり、それから健保、食費その他を引かれて、手取りは８円であった。そのときの17歳の人の賃金が１日60銭であったので、働いて歳を重ねれば賃金は上がるのだなと子ども心に実感した。また、その頃「少女の友」、「少女クラブ」などの月刊誌が愛読されていた。１冊30銭のところが毎月15日になると古本屋で15銭で買え、毎月楽しむことができた。人間はやればできるのだと思った。

5 たのしかった工場時代

工場には寮が併設されていた。全部で８寮あり、甲寮が４つと乙寮が４つであった。労働はきつかったが、年２回の慰安会では、歌舞伎、宝塚、松竹歌劇などの観劇のほか、蒲田撮影所の見学、熱海の海水浴、川崎の弘法大師参りがあり、楽しみであった。川崎で遊んだときには、よく５銭のキャラメルや10銭のくず菓子を買った。くず菓子は作る過程でできるものであり、けっして「くず」ではなかった。10銭というのは当時、電車で東京中どこにも行くことができた。そのような時代だった。

昭和８、９年ごろになると労働条件も改善され８時間プラス１時間の残業となった。11年まで勤め、休暇で一度比嘉に帰った。シマを出てから９年がたっていた。その間、友人たちは17、８歳になった頃、もう年頃であり、結婚適齢期であるという理由で家から呼ばれ、みな沖縄に帰っていたが、自分はすでに「養成見回り」、「寮見回り」など地位が高くなっていたので沖縄には戻らなかった。

昭和12年になると大阪の泉南郡の貝塚工場に入った。戦時下にはいり、紡績機械が鉄材として没収されるなどして工場が閉鎖され、従業員はみな解雇された。ハルは幸い、堺市役所総務課の売店の仕事に就くことができた。売店の仕事も性に合っていて、計算も好きで、続けることができた。

昭和18年になると、さらに兵庫県尼崎の堺工業の堺メリヤス工場に移った。そこは軍需工場であり、メリヤスのほか、干しバナナ、生ビールなどの配給も行った。

昭和20年、大阪の知人の家を訪ねたとき空襲にあった。迫り来る炎のなかで、自分が死んだらどうなるのだろう、と沖縄の家族のことばかりを考えた。当時の自分の給料は24円から徐々に上がって45円にまで上がっていた。女学校卒の初月給が21円のときである。なるべく多くを家に仕送りしたかったが、戦時下で10円までしか許されなかった。

6 アルゼンチンに渡る

昭和21年に帰沖し、比嘉で家の手伝いをはじめた。その頃、親同士が決めた許婚がいた。彼は兄を頼ってアルゼンチンにすでに移民していた。そして、仕事の見通しがつき、一緒に暮らせそうになったので、ハルを呼び寄せた。ハルはさっそく手続きにかかったが、手続きだけで２～３年かかった。なぜなら、呼び寄せには順位があり、二世（子）から先に許可され、妻は次のランクであった。したがって、まず順番を待つ必要があった。また、民政府は玉城村にあり、そこまで提出用紙を取りに行き、それから役場で戸籍謄本をとるのにも時間がかかった。さらに許可証はヘシキで交付され、距離的にも遠隔地であったので３年もの日数を必要としたのである。

夫、平良文作は1914年２月１日に比嘉で生まれた。1936年、22歳のとき兄、平良正房の呼び寄せでアルゼンチンに渡った。ロサリオ市で魚屋や洗染店、コルドバ州ブエノスアイレス市で機械工、グティエレス村では野菜づくりなどをして働き、苦労の末、1951年カラチャバイで自分の洗染（クリーニング）店を入手した（「在亜日本人／先染業50年の歴史」1968年）。文作が渡亜（アルゼンチン）したのは、妻よりも15年も早かった。途中戦争になってしまったために、妻の呼び寄せが不可能となり、このように長い歳月を要してしまったのである。

ハルがアルゼンチンに着いたのは1951年３月９日で、ハルは38歳になっていた。その後、1974年61歳のときにハルは一時帰国している。沖縄の比嘉に戻ったのはハル一人であった。後述するように経営する洗染店では住み込みの者もいたから、夫婦二人とも店を空けることができなかったからである。1983年、文作・ハル共に70歳で帰国するまで、文作は47年間、ハルは32年間をアルゼンチンで働き続けた。

7 アルゼンチンでの新しい生活

さて、1951年、ハルはアルゼンチンに到着した。新しい結婚生活が始まり、また店の手伝いも始まった。最初、アルゼンチン語はまったくわからず、

代金の額もわからなかったため、1、2、3の数字から覚えた。店の窓口業務のためである。ハルは日本から四つ玉の算盤を持っていっていたため計算自体に困ることはなく、現地のお客からの印象も悪くなかった。14歳から故郷を離れ、紡績その他で働き続けたことがハルに自信を与え、本人も「何もびくびくしなかったヨ」と述べている。

アルゼンチンへの移民の人たちの職業をみて驚くことは、洗染店や花卉園芸が多いことである。何故そのように多くのクリーニング店が必要とされていたのだろうか。移民の人たちの多くがクリーニング店を開くほど需要があるのだろうか。また、家庭では洗濯をしないのだろうか。不思議に思い、ハルに尋ねてみた。「アルゼンチンの人々はハイカラでよくクリーニング店を利用する」ということだった。そのころ100メートルおきに洗染店があったという。文作・ハルの商店は順調であり、数人の住み込みの者を含めて、10名前後を雇用していた。ハルはこれらの人々を賄い、店を手伝い、さらに、在亜比嘉同士会の役員などをこなした。小学校までしか行っていなかったが、読み書きそろばんはできたから、大使館の人（当時は井上大使といった）からも頼られた。たとえば、「宮城」という姓は読みがいろいろとあり、「みやぎ」とも、「みやしろ」とも、「みやぐすく」とも読んだ。そのような沖縄のことを教えてあげた。商店経営では、1銭でも多く稼がなければという思いで働いた。ハルの店の仕事は仕立てあがりが良いという評判で店は繁盛した。当地は白人、黒人、沖縄人と人種はさまざまであったが、共和国であったためか、差別はなく暮しやすかった。

8 失意の帰国へ

アルゼンチンはインフレが激しく、マーケットの野菜その他の値段が朝と昼からでは変わるほどであった。しかもそれが毎日であった。当初は永住するつもりで渡亜したのであった。しかし、こどもがなく、そういう物価の不安定さのなかで歳をとることが不安となっていき、帰国を考えるようになった。

店舗と家屋を売却する契約をドル建てで行っていた矢先、1982年にフォークランド紛争が起こり、ドルは下落した。この紛争の影響で買い手は資金繰りに困り、なかなか売れず、結局最初の契約額の4分の1から3分の1の価格で店舗と家屋を売却した。大損害であった。そしてほとんどが渡航費用として消えた。

9 そして、ハル商店へ

帰国後は家と墓を新築した。表側に食料品店の店舗を開き、「ハル商店」とした。その支払いには、一時帰国のときの残りの蓄えを当てた。後はわずかな店の収益で暮らすこととなった。帰国してみると貨幣価値はまったく変わり、ことばや人情も変わっていることに気付いた。こんなことならアルゼンチンの方がよかったと再度アルゼンチン行きを考えたが、寄る年波には勝てず、実現しなかった。

1994年10月23日文作が病死した。以後、年金もなく、日に数人のお客の買い物の収入で暮らしている。係累は若干あるが、実兄も亡くなり、子もなく、自分自身の老後および没後、誰が墓をまもってくれるのか非常に心配である。

実は筆者は、2006年9月に再度ハルを訪問した。ハルはその心配はもうしていなかった。近くの甥や親戚のものがあとは引き受けてくれるだろうという心境に変わっていた。そして、今は、卒業論文のために尋ねてくる留学生などに自分の人生を語り、また、県内で高校の教員をしている甥には貧乏だからといって差別をしてはいけない、と語り続けているという。ハルの人生経験から語られる貴重なことばだと思う。居間の壁には夫との楽しかりし日々やアルゼンチン時代の写真が飾られ、日々仏壇の夫と話しながら楽しく過ごしている。はりのある声で語り続けるハルのさらなる長寿を願いたい。（文中敬称略）

壁にかけられたアルゼンチン時代の数々のアルバム